

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370948

研究課題名(和文) 家族史から接近するサラワク・イバン社会におけるモダニティの形成

研究課題名(英文) Formation of Modernity in Sarawak Iban Society: Approach from Family History

研究代表者

内堀 基光 (Uchibori, Motomitsu)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：30126726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：マレーシアに属するボルネオ島サラワク州に住むイバン人の社会において近代がいかに形成されてきたかを家族史を通じて明らかにしてきた。焼畑農耕を主生業とし、精霊との交渉に重きを置く世界・社会観をもつイバン人は、19世紀の中葉から英国人の家系による私的王国のもとで近代化をとげてきたが、この過程を文献資料の解析による歴史学の対象としてではなく、いくつかの家族の記憶にもとづく体験の問題として捉えた。キリスト教への改宗、生業の変化、丘陵部における比較的孤立した日常生活から都市との関わりのある生活への変化など、近代化の多面的な進展を複数の世帯(家族)からの聞き書きによって確認した。

研究成果の概要(英文)：This research succeeded in elucidating several aspects of processes of modernization and features of modernity of the Iban society in Sarawak, Malaysia, through their family history. Traditionally, the Iban were/are shifting cultivators of hill rice with their folk belief systems broadly defined as 'animism'. Their society and culture have undergone radical changes since the mid-19th century, when Sarawak began to be governed by British Brooke Rajah as its monarch. The present research followed this process of transformation as the accumulation of experiences of Iban families through the memory transmitted verbally rather than as the subject of conventional historical study based on written material. Conversion to Christianity, changes in subsistence, and migration to urban/suburban areas are concretely surveyed in a series of fieldwork.

研究分野：社会文化人類学

キーワード：イバン サラワク ボルネオ 近代 家族史

1. 研究開始当初の背景

モダニティ(近代性)は19世紀初頭の西欧に起源をもつ歴史的事象であり、現在に至るまで世界各地の住民社会において進行中の社会・文化の現象である。文化人類学はこれまで社会変化、文化変容の題目の下で、この現象を構成する諸要素を数多くの非西欧社会において探ってきた。本研究は、連邦としてのマレーシアを構成する1州であるサラワク州の在来の民族集団の一つであるイバン人という相対的に小規模な範囲の社会について、モダニティの形成の過程と現段階での結実の特徴を解明しようとした。その限りでは、本研究は決して革命的な新奇さを追うものではなかった。

だが、これまでのような「変化」、「変容」の題目でなく、「形成」という視点を採ることによって、イバン人による内発的で自覚的な自己の新たな生成(形成)に力点を置き、さらにその中でも過去あるいは伝統からの「断絶」に関わる意識の前面化(前景化)を核と見ることを通して、近代性の諸構成要素、言い換えれば近代化の指標を全体的に記述することには、一定の新しみを見いだすことができた。変化や変容は、時にはなだらかに、時には急激になされるにしても、その過程で過去や伝統は継承や連続性の意識で捉えられるがちである。近代性の形成はそうした連続性の意識とは対極の意識に目を向けようとしたものである。

断絶の意識を近代化の諸指標の集合の核に置くことは心的過程に目を向けることを意味するが、これには家族史を収集し記録する過程で、そこで語られる時間軸に関わるデータの客観性を確認するクリティークとともに、それを語る語り口の分析が重要である。口承史と記憶、とりわけ集合的記憶についての現今の研究は、植民地経験や戦争経験、災害の経験などを中心に、枚挙にいとまがないが、一般にトラウマ体験としてまとめられる語り内に内在する心的過程の分析(例えば宮地尚子『環状島=トラウマの地政学(2007)』)が、こうした家族史の語り方から近代化という経験分析へのアプローチに目を向かせた一契機である。

また本研究の初動においては英国ロンドンの Roehampton 大学発達心理学教授の Cecilia A. Essau 博士の発想からヒントを受けた。氏はサラワク生まれのイバン人であり、イバンとしてまた女性として、はじめて海外大学での正教授職に就いた研究者である。Essau 博士が2009年内堀のもとにイバン人のキリスト教改宗の社会心理学的研究を共同研究として提案してきたのが、本研究のもう一つの契機となった。本研究では改宗のみをトピックとするのではなく、近代化過程における指標の一つとして改宗をとりあげることにした。それは近代化の心的過程は改宗という断絶に典型例を見いだすにしても、他

の指標、とりわけ焼畑陸稲栽培の放棄から換金作物への全面転換、異民族集団との婚姻関係の発生なども、心的過程における断絶の意識の視点から捉える必要があると考えたからである。

イバンの生業形態の変容、国民国家におけるイバンの社会的意識の変化の問題については、本研究申請者自身の研究(古くは1984年の'Transformation of Iban Social Consciousness', Turton, A. and S. Tanabe (eds.) History and Peasant Consciousness in South East Asia, Senri Ethnological Studies 13 211-234, National Museum of Ethnology, Osaka.から、新しくは2011年の「サラワク・イバン社会総体の生業布置:それはいかに語りうるか」、松井健編『グローバル化と生きる世界:生業からみる人類学的現在』、昭和堂、pp.21-63.までの諸論考)のほか、祖田亮次 People on the Move: Rural-Urban Interaction in Sarawak(2007)が、換金作物の導入と都市化に焦点を当て、Postill, J., Media And Nation Building: How the Iban Became Malaysian (2008)が、イバン人とのマレーシア国民意識の形成・展開という視点から成果を著しているが、いずれの研究も心的過程については精密な分析を加えるまでには至っていなかった。

西欧諸国の旧植民地としてサラワクはきわめて特徴的な歴史を有している。なによりも1841年以来の「藩王」ブルック家による一族支配百年という特殊な歴史がある。この背景のもとに、その後の日本軍による占領期、英国直轄植民地期、1963年のマレーシアへの参加による独立後現在に至るまで、行政組織、教育・言語政策を含む対在来諸民族集団への政策にはきわめて独自性に富んだものとなった。この独自性は主として歴史学の領域で研究されてきた。そこではマレーシア人研究者のほか、英豪米など英語圏の研究者が中心であったが、今日では多くの日本人の人文社会系研究者による調査研究も際立って目立つようになっている。本研究代表者は、その一端を切り開いてきた者としての自負をもちつつ、断続的にはあったが37年間に及んだイバン研究の総決算的研究を行う決意に至った。

2. 研究の目的

ボルネオ島西部、現在のマレーシア・サラワク州に「白人王国」としての植民地が成立して以降、1世紀半超にわたって、その地のイバン人の社会が経験した変容の過程を、複数の異なる相貌を見せる近代性の形成という観点から捉える。近代化に関わる当該地のローカルな指標を、在来の民族宗教からキリスト教・イスラームなど世界宗教への改宗、自給活動から換金作物栽培への転換、教育の普及と共同体内外での階層分化、通婚圏の拡

大および異民族集団との関係の変化に設定する。

現代の政治的文脈では、イバン社会は連邦国家内での少数派「先住民」でありながら、州内最大人口の民族集団という二面的な属性をもつが、一部この属性に由来する近代化過程のまだら模様と相克を伴う動態機序を、家族史という微視的な具体性に基づいて解明する。

3. 研究の方法

イバン居住地域を方言と社会交流圏に基づいて区分し、家族史データを聴取りによって得ることとした。使用言語はすべてイバン語を用いる。聞き取りに当たっては世帯主のみならず、家族（世帯）内外での複数の証言をとり、過去を構成する複数の視点の存在を確認した。証言は構造的なインタビューは補助的に限り、中心的には日常の会話からの断片的な情報を再構成することによって得られるものとした。

このデータを州・地区行政文書、旧準官報、キリスト教宣教会文書など、文献史料によって得られる地域ごとの政治経済的背景と対照させつつ比較分析するという方法をとった。これによって、家族史にまとめる口頭的語りという質的データを、近代化過程の地域差によるまだら模様、家族史における偶発的な出来事とより広い社会経済環境に由来する拘束的規定要因、家族内の世代間での社会的モチベーションの継承と断絶など、社会史と家族心理学的な枠組みに適合するタームを用いつつ、了解可能かつ比較可能なかたちで記述することとしたが、この作業は未完である。

4. 研究成果

【間接的研究成果】

本計画には当初海外の研究協力者として2名の参画を予定していた。1名は前項で述べたRoehampton大学発達心理学教授のCecilia A. Essau 博士である。氏はサラワク旧第2省南部（現スリアマン省）出身のイバン人であり、カナダ、ドイツで心理学の教育を受け学位を取得した研究者である。氏はまた日本の心理学研究者とも交流が続いており、日本での研究を行う意思もあったが、本研究の遂行にあたっては、現地調査での同行等はかなわなかった。氏は、氏が中等教育をサラワクで受けていた時期から、氏の家族をとおして本研究代表者内堀のきわめて親しい知己であり、氏の個人的なバックグラウンドもまた、氏の研究企画、および本申請研究を発想する一つの要となったことは既述した。本研究の間接的な成果の一つとして、氏に自らの自伝的著作を試みるように誘ったことがあげられる。これは元サラワク博物館長の現地研究者 Peter Kedit 博士が、内堀との議論のなか

で、自らの個人史を書くことに意義を認めたことに触発されたものである。この両氏の個人史はイバン人社会のモダニティを語るにあたってきわめて重要なものとなると期待している。本研究では、その糸口を作り得たと考えている。

もう1名の研究協力者はサラワク州の国立（法人）大学である Universiti Malaysia Sarawak（サラワク・マレーシア大学）の人類学専任講師 Elena Gregoria Chai 博士である。Chai 博士はサラワクを中心に客家系華人のアイデンティティ形成に関わる社会人類学の研究者であり、申請者がかつて所属していた東京外国語大学で博士号を取得している。氏は華人ながら、現地のマレー人社会にも知己が多く、また都市在住のイバン人をはじめとする先住民系の人びととの交流関係も有している。氏には内堀の本研究における現地調査に数度同行してもらい、イバン人と華人との関係に関わる調査に際して意味ある資料をえた。現在、氏は後述する Engkilili 地方における、イバン人と華人の河川交易について論文を用意している。これも本研究の間接的成果の一つとなる。

【直接的研究成果】

「間接的成果」に記した Essau, Kedit 両氏の自伝の試みは本研究にとって重要である。というのは、本研究では全部で6例の詳細な家族史データを現地調査における聞き取りによって収集したが、これらはフォーマルな高等教育を受けていない人びとが中心であったため、モダニティという面では偏りが否めないからである。

以下、年度別に現地調査とその成果を記す。初年度（2013年度）の調査は10月31日から11月20日まで行った。11月1日から11月19日にかけて、サラワク州都のクチン市、地方都市のスリアマン市、ベトン市、サラトゥック町、およびそれらの近郊のイバン人集落で行なった。家族史の完全記録をとる段階の一手手前の聞き取りであり、親族および友人関係を含む係累の広がりを探ることを中心に調査した。11月14日から18日にかけては、上記調査対象イバン人の一部係累の移住先であるブルネイ・ダルサラームに赴き、同国の村落地域の現状を観察した。スリアマンには旧第2省の各地から教育を受けたイバン人が集中してきたという歴史があるほか、マレーシア加入時に複数の有力なイバン人政治家を輩出したという背景があり、イバンの中等教育の普及史についての口頭資料を得た。スリアマン近郊のエンキリリ (Engkilili) は行政役場のほか小規模な市場を軸にした町であるが、町が臨む川の上下流近郊に多くのイバン人の集落が存在する。ここでは客家を中心とする華人とイバン人との交流がきわめて濃厚であり、交易関係のほか、多くの通婚事例が認められた。

第2年度の現地調査は2014年12月15日

から12月28日まで行った。この調査は州中央部のピントゥル市内および市近郊のイバン人集落で行ない、家族史の完全記録の一段階として、親族および友人関係を含む係累の広がり、ピントゥルにおける職業分布、および前年度(2013年度)に集中調査した省内南部地域の各地からピントゥル地域への移住史を探ることを中心に調査した。この地域はイバンにとっては相対的に新しい移住地であるため、サラワク南部には頻繁に見られない在来他民族集団との社会的交渉が大きな意味をもっていることが明らかとなり、とりわけタワウ人、ブクタン人との通婚を含む交渉がこの地のイバンの家族史に大きな意味をもつことが確認された。

第3年度(2015年度)の調査は8月27日から9月19日までの出張期間中、サラワク州最大のラジャン川流域のシブ市およびカピット市を中心とし、加えてスリアマン市近郊のイバン人集落で補充調査を行なった。カピットは古く1940年代末にDerek Freemanが今や古典的となったイバンの社会人類学の研究調査を行った地区であるが、これらの先行調査のもたらした資料を最大限生かすかたちで効率的な調査が行えた。前年度に続き家族史の完全記録の一段階として、親族および友人関係を含む係累の広がりを調査し、上記チャイ博士からは、華人系住民とイバン人との交流について、氏の調査に基づく知見を受けた。また博士を通じて、マレーシア・サラワク大学に学ぶイバン人学生とのインタビューも行なった。

第4年度(2016年度)の調査は8月18日から9月2日までの出張期間中、8月19日にはシンガポールで働くイバン人季節労働者の情報を得、労働現地を視察した。8月20日から8月31日まではマレーシア・サラワク州の州都クチン市のほか、地方のスリアマン市、シブ市、サラトック市、およびベトン市近郊のイバン人集落(ロングハウス)で聞き取り調査の補充を行なった。なかでもサラトック近郊のイバン村落には、1975年当時申請者がサラワクではじめての住み込み調査を行った村落が含まれているが、この村落は上記Essau博士の母方の親族が居住しているため、博士の履歴に重ね合わせた時間尺度にしたがったかたちでの資料を得た。家族史記録収集のとりあえずの最終段階として、先行諸年度に続いて親族および友人関係を含む係累の広がり州南部地域の各地における教育状況を探った。

研究期間の4年全体をとおして、現地の研究機関であるサラワク博物館、サラワクマレーシア大学、民間のジュガ記念文化財団設立のイバン研究資料室等において、イバン人の習俗、民芸、口承文芸関連の仕事をするイバン人に、本研究計画の趣意を伝え、文献資料等に関しての協力を依頼した。本研究代表者の長年の知己も多く、非公式なかたちの懇談で多くの知見が得られた。とりわけ、ジュガ

記念財団とは新たに良好な関係を築くことができ、これまでの日本人研究者によるサラワク研究、イバン社会・文化研究の総括的案内の雑誌特集を刊行することが決まり、そのための編集作業が本研究の最終年度からはじまった。その成果が現われるのは本研究期間の終了後となるが、家族史資料を理論的にいかに整理し配列、既述していくかという問題とならんで、本研究の成果を基盤とする発展として位置づけられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1)2014 UCHIBORI, Motomitsu 'When Semangat Becomes Antu: An Essay on Iban Ontology', "NGINGIT", Issue 5, The Tun Jugah Foundation, Kuching. pp.27-32. 招待論文(査読あり)

2)2014 内堀基光『『民族』とは何だろう』、『学術の動向』、日本学会議、2014年7月号、76-79 招待論説(査読なし)

3)2013 内堀基光「村落生活における時間と空間」、国立民族学博物館編(飯田卓責任編集)『霧の森の叢智 マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』、マダガスカル特別展示図録、118-125. 招待論説(査読なし)

[学会発表](計 8 件)

1) 内堀基光 コメンテータ 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の研究 人類学におけるミクロ マクロ系の連関2」公開シンポジウム、『「もの」の人類学をめぐって 脱人間中心主義の人類学の可能性と課題』、2016年11月12日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都・府中市)

2) 内堀基光 コメンテータ 一般公開セミナー「東京大学出版会・セミナー『科学と文化をつなぐ - アナロジーという思考様式』」合評会、2016年7月18日、東京大学出版会大会議室(東京都・目黒区)

3) 内堀基光 コメンテータ発表 「霊長類社会の重層性：人類の場合」、日本霊長類学会第32会大会自由集会、2016年7月15日、鹿児島大学(鹿児島県・鹿児島市)

4)内堀基光 コメンテータ 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探求 人類学におけるミクロ マクロ系の連関2」公開シンポジウム[『]体

制転換の人類学(2)』、2016年5月21日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都・府中市)

5)内堀基光 講演「文化人類学からの応答」日本文化人類学会第50回研究大会記念シンポジウム『人類の道徳性と暴力性をめぐって 隣接諸科学との対話』、2016年5月28日、南山大学(愛知県・名古屋市)

6)内堀基光 発表「凡庸ながらマルクスの箴言から：サルとヒトの解剖との対照の延長上で語ること」日本霊長類学会第31回大会自由集会、2015年7月18日、京都大学(京都府・京都市)

7)内堀基光 発表「人類小集団の生成と崩壊」進化人類学分科会、日本人類学会第68回学術大会、2014年11月3日、浜松アクロシティ(愛知県・浜松市)

8)内堀基光 講演「『民族』とは何だろう」日本学術会議自然人類学分科会公開シンポジウム『中等教育でまなぶ「人種」「民族」とヒトの多様性』、2013年4月27日、日本学術会議(東京都・港区)

〔図書〕(計 7 件)

1) UCHIBORI, Motomitsu
'An Institution Called Death: Towards Its Arche', TransPacific Press and Kyoto University Press, KAWAI, K. ed.
"Institutions: Evolution of Human Sociality", 2017, pp.39-58.

2)内堀基光 京都大学出版会、「他者としての精霊：イバン民族誌から」、『他者：人類社会の進化史的基盤』(河合香史編)、2016, pp.315-338.

3)内堀基光 放送大学教育振興会、『人類文化の現在：人類学研究』(山本真鳥との共編著)、放送大学大学院印刷教材、2016, 284 pp.

4)内堀基光 昭和堂、「果てしなき果てをめぐって」、『宇宙人類学への挑戦：人類の未来を問う』(岡田浩樹、木村大治、大村敬一編)、2014, pp.186-203.

5)内堀基光 放送大学教育振興会『改訂新版文化人類学』(奥野克巳との共編著) 2014, 227pp.

6)内堀基光 京都大学学術出版会、「死という制度：その初発をめぐって」、『制度：人類社会の進化史的基盤』(河合香史編)、2013, pp.37-57.

7)内堀基光 世界思想社、「心は身体的にしか語れない：心、命、魂は体のどこにあるか」、『身体化の人類学：認知・記憶・言語・他者』(菅原和孝編)、2013, pp.76-101.

6. 研究組織

(1)研究代表者

内堀 基光 (UCHIBORI, Motomitsu)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：30126726